

第一章 はじめに

村上龍は、『限りなく透明に近いブルー』で1976年5月に第19回群像新人文学賞を受賞、また同年7月に第75回芥川賞を受賞した。本作の内容は、セックスやドラッグを繰り返す退廃的な生活を繰り返す登場人物たちの日常的な生活を描いたものである。米軍基地が置かれる東京都福生市が舞台となっており、主人公リュウの語りを中心として進行していく物語である。

このような本作に対する先行研究では、現実世界と作品内容を結びつけた研究や登場人物に焦点を当てた研究、そしてリュウについて言及した研究等が見受けられる。特にリュウについては多くの先行研究が言及しており、本作の中心的な問題とされてきたものである。

リュウに対する先行研究の中で見られたものは、その多くがリュウの「見る」、「語る」性質について言及したものである。先行研究では、リュウは見たものを淡々と語る性質を持ち合わせており、そのような語りによって物語中で為される行為や発言から意味が拭い去られていることが論じられている。

このような研究動向について、リュウの語りによってあらゆる行為や発言から意味が拭い去られていることは首肯しうるものである。

しかしながら、稿者は物語全体を通して、ここまで挙げたリュウの性質というものが一貫したものではないと考える。そのような考えの根拠として、物語終盤のリュウが「黒い鳥」を目にする場面が挙げられる。この場面でのリュウの姿というのは、自分の存在を言語化したり自分の願望を語ったりするものである。そのようなリュウの語りは、見たものを淡々と語るものでなく、意味づけが為されていないわけでもない。つまり、ここではリュウの性質が変化している姿を見てとれる。

このようなリュウの性質が一貫したものではないという稿者の見解から、本論の目的は、リュウの性質の変化によって本作が描き出す物語の本質を追究することである。

目的を達成するための方法として、物語中でリュウがどのような環境でどのような振る舞いをするのかをみることでリュウの性質を明らかにする。そして、その性質が変化していると考えられる場面を挙げ、リュウの性質の変容を明らかにする。また、それらの問題点を解決しながら本作が描き出す物語の本質を明確にしていきたい。

第二章 リュウが置かれている環境

本章では、まずリュウがどのような環境に身を置きどのような影響を受けているのか明らかにする。

作品内では、「福生」という地名や黒人達と行なうパーティーにおいて「戦場用の注射器」という言葉が使われている。そのほかにも「ジェット機」を間近で見る場面等も見受けられ、リュウは東京都福生市の米軍基地周辺で暮らしていることがわかる。そしてパーティーを共に行なう黒人達には米兵も混ざっていることが考えられる。

このような環境の中、作品冒頭でリュウは「飛行機の音」と「虫の羽音」を聞き間違える場面がある。この聞き間違いについて先行研究では、薬物の使用による影響や聴覚の鈍感さを論じているものがある。しかし、稿者はこの聞き間違いが起こってしまう理由の一つとして、リュウの意識に米軍基地が内面化しているからであると考える。

そのような考えの根拠として、リュウはパーティーの最中に黒人達からひどい扱いを受けているときには、自らを「奴隷」、「人形」と感じている場面が挙げられる。ここでは、米国人から弄ばれる日本人という構図のなかでリュウが「奴隷」等を感じていることになる。米国人から弄ばれる日本人というのは、非対称的な力関係が顕れているとも捉えることができる。第二次世界大戦後も米国が基地を通して日本を支配し、その存在が内面化しているリュウは、米国人から弄ばれているとき「奴隷」と自らを表現してしまうのである。

このような、米国と日本の支配―被支配的な関係の象徴である基地がリュウの意識には内面化されていて、作品冒頭の聞き間違いが起こっていると考えられる。

続けて、本章では「黒い鳥」についても言及する。「黒い鳥」は巨大で脅威的な存在として描かれ、それを認識するリュウは恐怖や不安を感じている。

この「黒い鳥」について先行研究は、「現代社会」やその構造の暗喩・示唆であるとしている。先行研究におけるこのような考察には稿者も肯定的な立場をとっている。

まず、リュウは「黒い鳥」を認識した場面で「あの町が鳥」と発言するのであるが、「あの町」とは米軍基地周辺の街のことだ。米国からの支配を受ける街が「黒い鳥」であり、それが巨大で脅威的なものであることからすると、日本が未だに被支配的な立場である「現代社会」と読み取ることも可能ではないだろうか。また、巨大で脅威的なものであることから、抗えないような力関係を叙述したものとも考えられよう。

さらに、「黒い鳥」を認識したリュウの姿は、物語前半とは異なる。「黒い鳥」を認識した後、リュウは自分の存在を言語化したり、自らの願望を語ったりする。これまでの見たものを淡々と語るリュウとは変化が見られるのである。このように「黒い鳥」の場面では、「現代社会」を示唆するだけでなく、リュウの性質の変容も見受けられるのである。

第三章 リュウとリリー

第三章では、リリーという登場人物とリュウの関係について論じていく。まずリリーの特徴として、リュウと二人だけの空間でしか登場しないということが挙げられる。リュウの友人達と接触を持つことがなく、それらとは一線を画した存在であると言える。

このように描かれているリリーには、リュウの語りや考え方と共通している部分やリュウの存在について補完するような語りが見られる。さらに、ものを見て語るだけのリュウに対して「赤ん坊」のようだとリュウの胎児性を指摘している。

それらのリリーの態度から先行研究は、リュウとリリーの間を「子」と「母」に擬えているものやリリーはリュウの分身であるという論等が為されている。

稿者はこれらの論も踏まえ、二人の関係を「鏡」に擬えることができるのではないかと考える。二人の空間でしか描かれないことや語りにも共通性が見られること、またリュウの性格等を語ることもできる存在であることから、リリーがリュウを映し出す「鏡」としての役割を果たしていると考えられる。

ただ物語後半では、このような二人の関係が終わってしまう。それはリュウが「黒い鳥」を認識したときに訪れる。その場面では、「黒い鳥」を認識しているリュウとできないリリーという構図やリリーがリュウに異常を感じ取っている様子からも判断できる。これまでの共通性が見られた二人の関係は断絶してしまっているのである。

このような二人が離れていく様子や離れていく際にリュウが自らを語ることもできる存在となっていることから、リリーの役割やリュウのどのような人物であるのか判断できよう。

まず、リリーはリュウが自らを語るようになるまで案内する役割であるということだ。そして、リリーと

離れたリュウの様子は、願望を語ったり自らの存在について語ったりできる人物へと変わっている。このようなことから、リュウは自らを語るための「鏡」を得た人物である。つまり、「鏡」を得たリュウにリリーは必要でなくなったことがいえる。さらに、得た「鏡」によって映し出されたリュウというのは、「黒い鳥」を認識し「現代社会」に身を置くことを自覚した人物である。このような姿は、日本人と重なる部分があるのではないだろうか。

第二次世界大戦後も米軍基地が置かれ、米国と日本との力関係は対称とはいえないだろう。また、そのような力関係は抗いようのない巨大なものであり逃れることはできない。そして、「黒い鳥」から逃れられないリュウというのは、このような日本人の姿と重ね合わせることができる。つまり、「鏡」を得たリュウの存在を見ることで、最終的に日本・日本人をも映し出すというも物語の重要なテーマが窺えるのである。

第四章 結論

まず、ここまでの流れから本作が描くテーマの一つとして挙げられるのは、「現代社会」を示唆するということである。

また、リュウの性質の変化を追究することでも、日本・日本人を映し出すという重要なテーマを読み取ることができた。

このような現実世界と「現代社会」というのは、本作が書かれた当時の社会に限ったものではないことに注意したい。現代でも米軍基地が置かれ、多くの日本人は被害を受け続けている。そうした状況の中でも基地が置かれ続けるのは、日本対米国の非対称的な力関係が続いていることも原因であろう。

本作は、リュウの語りを中心として「現代社会」を叙述するという小説と呼ぶことが可能ではないだろうか。

そして最後に「リリーへの手紙——あとがき」について触れたい。この「手紙」は、リュウからリリーへと書かれた手紙となっている。このことから本作は、「現代社会」を描きつつもフィクショナルな世界に閉じ込められた作品である。

これらの要素からして『限りなく透明に近いブルー』は、現実世界と近い形で物語を描き、さらにそれがフィクションであるということを明らかにすることで、現実世界日本に対する批評性を持った作品といえることができる。